がんばれヘンリーくん

クリアリー作　松岡享子訳　ダーリング絵

Cleary, Beverly　　NDC 933
がんばれヘンリーくん
ベバリイ＝クリアリー著　松岡享子訳
ゆかいなヘンリーくんシリーズ・1　171P　22cm
原題：Henry Huggins

1968年12月10日　初版発行©
1982年12月15日　第27刷発行

定価 850円
検印廃止

訳　者　松岡享子
発行人　黒川　巌
編集人　石井和夫
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
発行所　株式会社　学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5 〒145
振替 東京8-142930

この本に関するお問合せ，製本上のミスなどがありましたら，下記あて文書または電話でお知らせください
東京都大田区上池台4－40－5　〒145
学研「お客さま相談センター」児童図書係
電話(03)720-1111

無断複写複製(コピー)を禁ず

ISBN 4－05－003475－1 Printed in Japan

がんばれヘンリーくん

ベバリイ=クリアリー作　ルイス=ダーリング絵
松岡享子訳

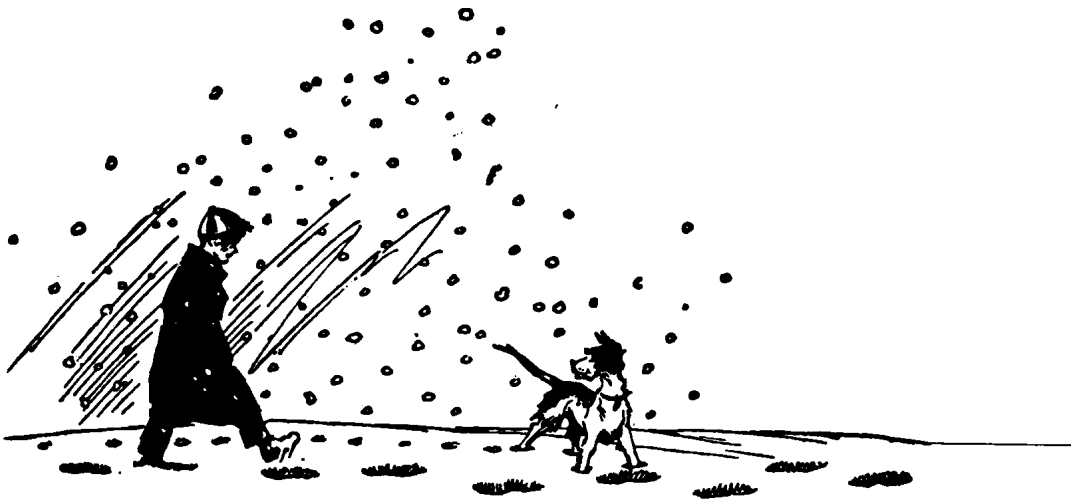
学研

がんばれヘンリーくん

もくじ

1 ヘンリーとアバラー

2 百万(まん)びきのグッピー



3 ヘンリーと夜のお客さま

4 みどりのクリスマス

5 うすもも色の犬

6 ひろったものはその人のもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

HENRY HUGGINS
by Beverly Cleary
Original English edition published
by Morrow, New York
Copyright 1950
Japanese translation right arranged
through Charles E.Tuttle Co. Inc.,Tokyo

●

装丁デザイン
山口はるみ

作者紹介　ベバリイ＝クリアリー

一九一六年、米国オレゴン州の小さないなか町に生まれ、六才のときポートランドに移り、高校卒業までそこで過ごした。カルフォルニア大学を卒業後、さらにワシントン大学で図書館学を学び、一九四〇年に結婚するまで、ワシントンのヤキマで児童図書館員として働いた。結婚後も、第二次大戦中は陸軍病院の図書館で働くなど図書館員としての十分な経験をつんだ。

ながいあいだ子どもの本を扱ううち、クリアリーは、子どもの本について一つの不満を持つようになった。それは、子どもの本といえば、ふだんの子どもたちの生活からは程遠い世界を描いたものが多く、ふつうの子どもたちのことを描いた愉快な物語が少ないということだった。そこで、現実の子どもの生活をありのままに描いた物語の必要を痛感し、児童図書館員として子どもに接した豊富な経験を生かして、子どもの本の創作の道にはいった。

第一作が、一九五〇年発表の「がんばれヘンリーくん」で、たちまち子どもたちのあいだでひっぱりだこで読まれ、つづいて、「ヘンリーくんとアバラー」「ヘンリーくんと秘密クラブ」など、一連のヘンリーものを書き続けた。そのほかにも、ごくふつうの生活をしている少年少女を描いたユーモアあふれる作品を次つぎに発表し、また一九五六年以後は、「十五才」「ジーンとジョニイ」「いちばん幸運な少女」など、思春期の少女を主人公にした小説もいくつか書いている。

HENRY HUGGINS

がんばれヘンリーくん

ベバリイ＝クリアリー作
ルイス＝ダーリング絵
松岡享子訳

1 ヘンリーとアバラー

ヘンリーくんことヘンリー＝ハギンズは、三年生です。かみの毛は、たわしみたいにつったっていて、前歯は、ほとんどはえかわっていました。ヘンリーは、クリッキタット通りにある白い四角い家に、おとうさんとおかあさんと、三人でくらしていました。六つのときに扁桃腺の手術をしたのと、七つのときに、サクラの木から落ちてうでをおったのとをのぞけば、ヘンリーの身のうえには、これまで、あまりたいしたことはおこっていませんでした。

なにか、あっというようなことが、おこらないかなあ……ヘンリーはよく、そう思いました。けれども、これといったおもしろいことは、なにひとつおこりませんでした――すくなくとも、三月のある水曜日の午後までは。

ヘンリーは、毎週水曜日の放課後、バスに乗って、町のYMCA（青少年のためのキリスト教団体。スポーツ、レクリエーションなどをおこなう。）へ、およぎにいくことにしていました。一時間およいでから、またバスに乗ってうちに帰ると、ちょうど

晩ごはんの時間にまにあいます。およぎにいくのはたのしみでしたが、でも、べつに、むねがわくわくするというほどのことではありませんでした。

これからお話ししようとするある水曜日のこと、ヘンリーは、YMCAを出てから、道で、男の人がサーカスのポスターをはがしているのを、そばに立って見ていました。それから、ポケットに手をいれて、五セント玉（一セントは一ドルの百分の一）が三つと十セント玉がひとつあるのをたしかめてから、かどのドラッグストア（もともとはくすり屋だが、いまは日用品、雑貨を売るほか、かんたんな食事もできるようになっているよろず屋。）に、チョコレートアイスクリームを買いにいきました。ヘンリーのかんがえでは、アイスクリームをたべてからバスに乗り、料金ばこに十セント玉をいれて、うちに帰るはずでした。

ところが、そうはいかなかったのです。

ヘンリーは、ドラッグストアでアイスクリームを買って、五セント玉をひとつはらいました。そして、出がけに、雑誌売り場でマンガを立ち読みしました。バス代をのけると、五セント玉がふたつしかのこらないので、買うわけにはいかなかったのです。

ヘンリーが、アイスクリームをなめなめマンガを見ていると、ゴシゴシゴシという音がしました。ふりむいてみると、すぐうしろに犬がいて、しきりにからだをかいています。

その犬は、なになに種というような犬ではありませんでした。大きい犬というには小さすぎるし、

かといって、小犬というには、あまりにも大きすぎます。白い犬というのではありません。というのは、茶色いところもあれば、黒いところもあり、そのあいだに、黄色がかった点てんもあったからです。耳はピンと立っていて、しっぽは細長くのびていました。

犬は、おなかをすかしていました。ヘンリーがなめると、犬もなめ、ヘンリーがのみこむと、犬ものみこみました。

「よう、ワン公。」と、ヘンリーはいいました。「このアイスクリームは、おまえにはやれないよ。」

ブルン、ブルン、ブルンと、しっぽがゆれました。

「ひと口だけでいいんですよ。」と、犬の茶色の目がいっているようでした。

「あっちへいけ。」と、ヘンリーは命令しました。でも、そんなにきつくはいいませんでした。ヘンリーは犬の頭をなでてやりました。

ブルッブルッ、ブルッブルッ。しっぽが、いっそうはげしくゆれました。ヘンリーは、アイスクリームを、最後にひとなめしてからいいました。

「よしよし、そんなにおなかがすいているんなら、おまえにやるよ。」

アイスクリームは、ひと口できえてしまいました。

「さあ、あっちへいけよ。ぼくは、バスに乗って、うちへ帰んなきゃなんないんだから。」と、ヘ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ンリーは、犬にいいました。

ヘンリーがドアの方へ歩きだすと、犬もついてきました。

「あっちへいけったら、このがりがり坊主。」と、ヘンリーは、あまり大きくない声で、いいました。「おうちにお帰り。」

犬は、ヘンリーの足もとに、すわりこみました。ヘンリーは、犬をじっと見ました。犬も、ヘンリーを、じっと見ました。

「おまえ、うちがないのか。すごくやせてるな、あばら骨がすけて見えてるじゃないか。」

ブルン、ブルン、ブルンと、しっぽがこたえました。

「首輪もつけてないな。」

ヘンリーの心に、ひとつのかんがえがうかびました。この犬、飼えないかなあ！　ヘンリーは、もうずうっとまえから、犬がほしい犬がほしいと、思っていたのです。そうしたら、いま、ヘンリーのものになりたがっている犬が見つかったのです。おなかをすかしている犬を、道ばたにほうっておいて家へ帰るなんて、とてもできません。おとうさんとおかあさんが、なんていうかわかったらなあ！　ヘンリーは、ポケットに手をつっこんで、五セント玉をチャラチャラいわせました。そうだ！　これでおかあさんに電話をかけてみよう。

「おいで、アバラー。こっち、こっち。おまえのこと、アバラーってよぶことにするよ。やせて、あばら骨が見えてるからな。」

犬は、ヘンリーのあとからトコトコと歩いてドラッグストアのすみにある公衆電話のボックスまで、ついてきました。ヘンリーは、犬をボックスの中へおしこんで、ボックスの戸をしめました。公衆電話をつかうのは、これがはじめてでした。ゆかに電話帳をおき、その上に立ってせのびをして、やっと送話器に口がとどきました。ヘンリーは、交換手に番号をいって、お金いれに五セント玉をひとついれました。

「もしもし——ママ?」

「まあ、ヘンリー! おまえどこにいるの?」おかあさんはびっくりしたような声を出しました。

「YMCAのそばのドラッグストア。」

アバラーが、からだをかきはじめました。ゴシゴシゴシ。電話ボックスの中では、音が大きくうつろに聞こえます。

「まあ、ヘンリー、いったいなあに、その音?」と、おかあさんはききました。

アバラーは、イェーン、イェーンと鼻をならしてなき、ついでワオーンと、ながく尾をひいてほえました。

「ヘンリー！」おかあさんは大声でさけびました。「おまえどうかしたんじゃないの？」
「どうもしやしないよ。」ヘンリーも、大声で返事をしました。
おかあさんって、どうしてああいつもいつも、ぼくになにかあったんじゃないかって思うんだろう。なんにもないのにさ、気が知れないやと、ヘンリーは思いました。
「アバラーがいるだけだよ。」
「アバラー？」
おかあさんは、いらいらしておこりだしました。
「ヘンリー、どういうことなのか、ちゃんと話してごらんなさい。」
「いま話そうと思ってるんじゃないか。」
ヘンリーがそういったとき、アバラーが、まえより大きな声でワオーンとほえました。
人びとが、なにごとだろうと、電話ボックスのまわりにあつまってきました。
「ママ、ぼく、犬みつけたの。どうしても飼いたいんだよ。いい犬だし、ぼく、ごはんやったりあらったり、ぜんぶ自分でするからさ。ね、おねがい。」
「さあ、どうかしらねえ、おとうさんにうかがってみなくっちゃ……。」
「ママ！」ヘンリーは、なきそうな声を出しました。「ママったら、いつもそういうんだから！」

ずっとつまさきで立っていたので、ヘンリーはくたびれてきました。それに、電話ボックスの中は、だんだん暑くなってきます。

「ねえ、ママ、おねがい。いいっていってよ。そしたらぼく、もう一生なんにもほしいっていわないから！」

「そうね、じゃあ、いいわ。おまえが犬を飼ってはいけないという理由は、べつにないんですものね。でも、バスに乗せてつれて帰ってこなきゃ、だめですよ。きょうは、おとうさんが車をもっていってらっしゃるから、おかあさん、むかえにいってあげられませんからね。自分でつれてこられる？」

「こられるさ！　かんたんだよ。」

「それからね、ヘンリー、おそくならないうちに帰ってくるんですよ。雨がふってきそうだから。」

「わかったよ、ママ。」

ゴシゴシゴシ。

「ヘンリー、そのゴシゴシっていう音はなんなの？」

「ぼくの犬のアバラーだよ。ノミかいてんの。」

「まあ、ヘンリー。」おかあさんは、うめくようにいいました。「おまえ、ノミのついてない犬さ

がせなかったの？」

ヘンリーは、このへんで電話をきったほうがよさそうだと思いました。

「さあ、こい、アバラー。バスに乗って、うちへ帰るんだよ。」

大きなみどり色のバスが、ドラッグストアの前でとまりました。ヘンリーは、犬をだきあげました。アバラーは、思ったよりずっとおもくて、バスに乗せるのにひと苦労しました。やっとのことでバスに乗り、さてどうしてポケットから十セント玉を出したものかとかんがえていると、

「おい、ぼうや、犬はバスには乗せられないよ。」と、運転手がいいました。

「どうしていけないの？」と、ヘンリーはききました。

「バス会社の規則だよ。犬はだめだ。」

「ええっ！　じゃ、どうやってつれて帰ったらいいの、おじさん？　ぼく、どうしても、この犬、うちへつれて帰らなきゃなんないんだよ。」

「きのどくだが、規則は、わしがつくったわけじゃないからな。生きものを乗せるときは、きちんと、はこにいれなきゃだめなんだよ。」

「ふうん、そうか。どうもありがとう。」

ヘンリーは、アバラーをだいて、しぶしぶバスをおりました。

「そうか、じゃ、はこがいるなあ。でも、なんとかして、つぎのバスに乗せてやるよな。」と、ヘンリーは、犬にやくそくしました。

ヘンリーは、ドラッグストアへ、ひきかえしました。アバラーは、すぐそのあとからついてきました。

店にはいると、ヘンリーは、歯みがき売り場のところにいた男の人にたずねました。

「あの、すみませんけど、大きなはこひとつくれませんか。この犬がはいるくらい大きいのがいるんです。」

店員は、カウンターから身をのりだして、アバラーを見ました。

「ダンボールのはこがいいかな?」

「ええ、おねがいします。」と、ヘンリーはいいました。

はやくしてくれないかなあ、うちに帰るのがおそくなるのに……と、ヘンリーはいらいらしました。

店員は、カウンターの下から、はこをひっぱりだしました。

「いまあるのは、このヘアトニックのあきばこだけだな。これならはいるだろう。どういうわけで犬をボールばこにいれようっていうのか、わしにはさっぱりわからんがね。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com